

中西 弘樹¹: 長崎県野母崎海岸にブナの殻斗が漂着Hiroki NAKANISHI¹: Cupule of *Fagus crenata* Blume drifted ashore on the coast of Nomozaki in Nagasaki Prefecture, southwestern Japan

ブナ *Fagus crenata* Blume (ブナ科) は冷温帯自然林の代表的な種で、鹿児島県高隈山から北海道黒松内低地帯まで分布する日本の固有種である (Horikawa 1972). ブナの殻斗の漂着は分布域の中心である東北地方の日本海側沿岸ではふつうに見られ、対馬海流の影響で、分布域を越えて、北海道北部日本海沿岸にまで漂着している (中西 1999).

九州ではブナの生育地は限られており、海拔およそ1,000m以上の山地に生育して、その殻斗の漂着はこれまで知られていなかった。しかし、1998年6月に長崎県西彼杵郡野母崎町(現長崎市)野母崎の海岸で1個を発見することができた(図1)。殻斗の表面はかなり風化し、長さは22mm、4つの裂片に別れ、1つの裂片の幅は7.5mmであった。漂着起源の可能性のある九州山地の分水嶺の西側では、ブナは佐賀県の背振山系と作礼山、長崎県の雲仙山系と多良岳、熊本県の阿蘇山系、鹿児島県の紫尾山に生育地がある(図2)。しかし、地図で地形を見る限り、佐賀県、長崎県、熊本県の生育地を源とする河川は、東シナ海に注がず、唯一鹿児島県の紫尾山が可能性がある。すなわち、この山系の谷川の水は東シナ海に注いでいることから、そこから対馬海流に乗って野母崎海岸へと運ばれてくる可能性が考えられる。しかし、紫尾山のブナの個体数は多くはなく、また、ブナの生育地は谷川沿いではないので、海に出て、長崎県の海岸まで流れてくる可能性はきわめて低い。たとえブナの木の下に1万個のブナの殻斗を置いたとしても、九州の生育地は山地の上部であり、落ち葉の間に埋もれてしまい、河川に出るのは1個あるかないかであろう。さらに海に出ることは困難である。したがって、野母崎海岸に流れてくる確率はきわめて低いことになる。一方、本州の日本海側海岸に出たブナの殻斗は、対馬海流の影響で日本海沿岸を北上するのがふつうで、本州沿いに南下して、しかも九州北部沖を通り、さらに九州北部を西廻りに南下したとは考えられない。尚、台湾にはタイワンブナ *Fagus hayatae* Palib. が分布しているが、限られた山地に生育している(金平 1936) ことから、この殻斗が日本に漂着してくる可能性はほとんどない。

以上のように、長崎県野母崎海岸へのブナの殻斗の漂着は、通常では考えられない、きわめて可能性の低いことがおきた一つの例である。ブナの殻斗は散布体ではないので、分布の拡大には繋がらないが、生物の分布拡大はこのようにまれなことでも歴史的時間を考えれば、お



図1. 漂着したブナの殻斗。

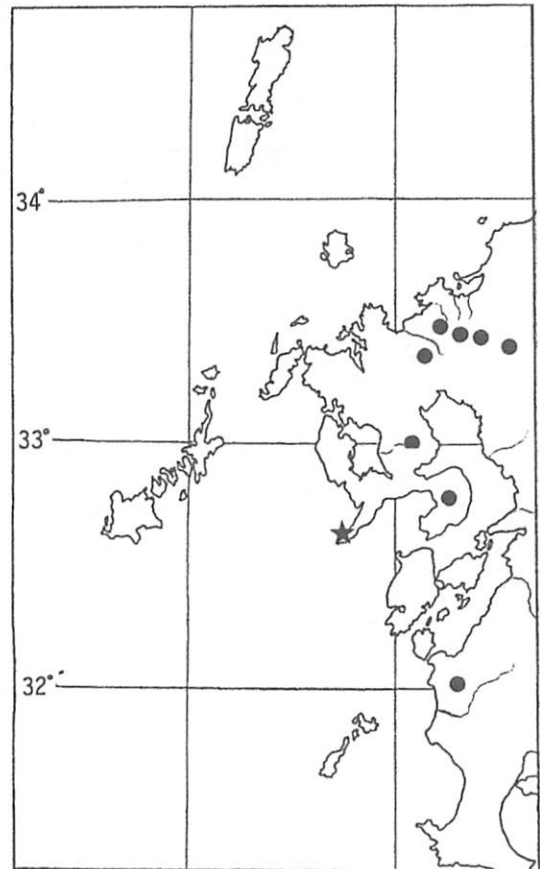


図2. 九州西部におけるブナの分布(●)と漂着地点(★)。

こりうることを、この漂着は示している。

引用文献

Horikawa, Y. 1972. Atlas of the Japanese Flora. 12+500+8pp., Gakken, Tokyo.
 金平亮三. 1936. 増補改版台湾樹木誌. 754pp., 養賢堂, 東京.
 中西弘樹. 1999. 漂着物学入門. 211pp., 平凡社, 東京.

追記：本稿投稿後、2005年9月、上記の発見地から北へ約30kmの長崎市外海町（旧西彼杵郡）研石浜においてもブナの殻斗を発見することができた。この殻斗は4つの裂片のうち、2つを欠き、残る2つの裂片も先端部が破損しており、長さ約17mmしかなかったが、6mmの果柄が残っていた。

¹ 〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学教育学部生物学教室

¹ Biological Institute, Department of Education, Nagasaki University, 1-14, Bunkyo-machi, Nagasaki 852-8521, Japan



1mmのスケール



(★) 発見地、(●) 市の中心地を示す